



ALPS

BETTER LIFE

>>> 自分時間

ボランティア活動・社会貢献活動 <<< 第1回

「外国人の子ども」を 支援するボランティア

「外国人の子ども」の支援

私は4年ほど前から、「外国人の子ども」を支援するボランティアをしています。もう少し具体的に言うと、外国人の子どもに勉強を教えたり、彼らの居場所作りをしています。

多くの人は、日本に外国人が増えていることを少なからず実感しているはずですが、街中で中国語を耳にしたり、コンビニの店員さんが外国人だったりなど、生活の中で彼らに触れる機会は確実に増えています。しかし、「外国人の子ども」を支援するボランティアと言われても、何をするかピンとこない人がほとんどでしょう。

そこで、まずは「外国人の子ども」の現状について、最初に簡単に説明したいと思っています。それと関連づける形で、私たちが行っているボランティアを紹介します。

「外国人の子ども」とは？

「外国人の子ども」とは、親が外国出身の子どもを指します。例えば、「親と一緒に中国から日本へ移住してきた子ども」がそうです。2019年時点で、15歳未満の「外国人の子ども」は、日本に約25万人います（法務省「在留外国人統計」）。2012年は約18万人だったので、この7年で4割ほど増えています。

出身国で見ると、75%がアジア出身です。なかでも中国出身者が最多で（全体の34%）、ブラジル（15%）、フィリピン（11%）と続きます。

ただし一口に「外国人の子ども」と言っても、実態は様々です。中には日本国籍をもつ子どももいるので、「外国人の子ども」という名称は実は正確ではありません。「外国につながる子ども」「外国にルーツをも



学校の書き初めの宿題も手伝います

「北区学び場 Let's Study」
参加ボランティア
高野 渉

○
[たかの・わたる] 平日は出版社に勤務。「日本語教育」の書籍編集に関わったことがきっかけで、日本語ボランティアに参加するようになる。「北区学び場 Let's Study」には2016年より参加。

つ子ども」など複数の呼び方がありますが、ここでは分かりやすさを優先して「外国人の子ども」と呼びます。

外国人の子どもの多くが直面しているのは、「学習」上の問題です。彼らは日本語力が十分でないために、学校の勉強についていくことができないという悩みを抱えています。特に「高校受験」が高い壁で、高校に進学できなかったり、進学しても中退してしまう子どもがいます。

Aさんの場合

以上が、「外国人の子ども」の輪郭ですが、抽象的な話でイメージがつかみにくいと思います。なので以下では具体例として、私たちのボランティアに通っていたAさんのプロフィールを紹介したいと思います。

Aさんはミャンマー出身の女の子で、母親（ミャンマー人）と一緒に中学2年生



>>> ボランティア活動・社会貢献活動

のときに日本に来ました。母語はミャンマー語で、日本語がゼロの状態での来日です。神奈川県にアパートを借りて、Aさんは日本の中学校に通い始めました。しかし、そこでいじめに遭ったため、環境を変えようと東京都へ引っ越してきます。私たちのボランティアに来るようになったのもそれからでした。

彼女は2つの問題を抱えていました。1つ目は「日本語」の問題です。日本語教室で日本語を勉強しつつ、並行して中学の授業にも出席しますが、当然ながら最初は全く言葉が分かりません。テストの結果も散々です。そんな彼女も、約1年後に「高校受験」を控えていました。

2つ目の問題は「人間関係」です。Aさんは最初に通った学校でいじめに遭い、東京の中学に移ってきました。しかし、新たな学校でも話し相手になってくれる子はいませんでした。「友だちがいらない」ともらっていました。また自宅でも、唯一の家族である母親は飲食店のバイトを掛け持ちしているために忙しく、帰宅するのはいつも深夜1時過ぎで、家に着くなりすぐに寝てしまいます。学校と家の両方で、彼女は孤独感を味わっていました。高校進学が危ぶまれたAさんですが、外国人の子どもを対象とする特別入試を利用し、なんとか都立高校に進学することができました。日本語力も、入試の作文で漢字をよどみなく書けるくらいには向上しています。いま彼女は高校に通っています。

が、やはりまた言語の壁はあるようで、学校の勉強は難しいと言っています。

以上が、「外国人の子ども」であるAさんの話です。彼女のたどった道は、外国人の子どもの典型例と言えるものでしょう。彼らの多くが、「日本語」と「人間関係」で悩みを抱えています。

以下ではこの2つの点から、私たちボランティアが何をしているのかを紹介していきます。

学校の「日本語」が分からない

外国人の子どもは、「日本語」の能力が原因で、学校の勉強で苦戦しがちです。

ただ、実際に子どもたちと話してみると、多くの子は基本的な日常会話なら問題なくできます。簡単な意思疎通くらいなら十分にこなせる子が多いのです。

そういう様子を見ると、「学校の授業にもじきについていけないようになる」と思いたくなるのですが、そう簡単にはいきません。なぜなら、日常会話に必要な日本語と、学習に必要な日本語は違うからです。

これは英語に置き換えてみると分かりやすい。英語をゼロから学ぶとき、「とりあえず話したい」だけなら、基本的な文法とフレーズさえ覚えれば事足りります。しかし、英語で書かれた教科書を読んだり、あるテーマについて英語で文章を書くためには、並大抵ではない学習時間が必要です。つまり、「生活」するために必要な言語

力（生活言語能力）と、「学習」するために必要な言語力（学習言語能力）には、大きなギャップがあるのです。一説では、生活言語能力は数年で身につくのに対し、学習言語能力の習得には少なくとも5年は必要とされます。

上述のように、外国人の子どもの大きな壁は「高校進学」です。来日して数年で高校受験を迎える子どもは、学習言語能力が身につかないままに受験することになるため、思うように点数が取れません。特に彼らが苦手とするのは、「国語」や「社会」のような、高い学習言語能力を要求する教科です。勉強に自信のない生徒の中には、高校進学そのものを諦めてしまう子もいます。

そこで、私たちのボランティアでは、彼らに「学習支援」をしています。例えば子どもたちの学校の宿題を手伝ったり、苦手な教科を教えるなど、子どもたちが学校の勉強についていけるように、そして高校受験を乗り越えることができるようにサポートしています。

「人間関係」からの疎外

「外国人の子ども」の話題でいつも取り上げられるのは、「日本語」の問題です。子どもたちの日本語力を伸ばすような体制づくりが必要だ、とよく言われます。実際、私たちのボランティアでも、彼らの日本語力を伸ばすことは大切な目標の1つです。



普段のボランティアの様子

しかし、外国人の子どもが抱える問題は日本語だけではありません。それと同じくらいに、あるいはそれ以上に彼らが苦しんでいるのは、「人間関係」です。子どもたちの話を聞いていると、彼らは日本語だけでなく、人間関係にたいへん苦労していることが分かってきます。

子どもたちが口々に言うのは、「学校には友だちがいない」とか「学校では一言も話さない」ということ。学校で孤立し、話し相手がいらないことに悩んでいます。こうした孤立の背景としてあるのは、当然ながらまず日本語力の低さです。でもそれ以外にも、「見た目が違う」「言葉が違う」「服装が違う」といったことが、彼らを教室内のコミュニケーションから遠ざけます。

私たちが活動する東京都北区は、外国人の人口が多い地域ですが、それでも学校の

1クラスあたりの外国人の子どもの数は、せいぜい1人か2人です。割合で言うと彼らは圧倒的なマイノリティであり、それゆえにマイノリティとしての扱いを受けがちです。

例えば、まだ日本語がうまく話せないのは子ども自身も分かっていて、それでも話をしたくて日本語で話しかけたのに、「日本語が変」だと言って笑われる。名前をからかわれて、嫌なあだ名をつけられる。肌の色が違うと陰口を言われる。こうしたことが、いかに子どもたちの心を傷つけるか、想像するにあまりあります。

こうした孤立状態は、子どもの学習意欲を奪います。「みんなが自分を嫌っている」という思いが、子どもの自己肯定感を切り刻み、根強い劣等感を育てます。実際、「母国に帰りたい」「日本語を勉強したくない」という思いを打ち明ける子どもは少なくありません。

何かを学ぶということが、自分の将来に期待して投資することだとすると、自己肯定感を失って将来に期待を持たない子どもは、自らの学習意欲を枯れさせてしまうのです。

「私はあなたの敵でない」と伝えること

人間関係で苦しんでいる子どもたちに対して、私たちボランティアができることは、「私たちはあなたの敵ではない」と伝えることです。ここではあなたの日本語を誰も笑わないし、あなたの肌の色について陰口

を言う人もいない。私たちはあなたの敵ではなく、あなたを否定する人は誰もいない。あなたのことを大切に思っている人がここにいるのだということを、言葉や態度で伝えるのです。これが、このボランティアの2つ目の目的である「居場所作り」です。

ボランティアに参加した当初の私は、とにかく「勉強を教える」ことを第一に考えればよいのだらうと思っていました。学校の勉強についていけるようになれば、子どもたちの問題は解決するのだらうと素朴に考えていたのです。でも、いろんな子どもたちを見て、彼らの話を聞いていくうちに、勉強を教えることよりも、彼らが「否定されない場所」を作ることのほうが重要ではないかと思うようになりました。

このボランティアでは、日本語で話すことを強制しないし、勉強に飽きた子どもが大騒ぎしても大目に見ます。それはここが、子どもたちにとって「自分を否定されない場所」だからです。自分はこのにいてもいいのだと思える場所は、学習するときに一番必要な環境です。

こうした「居場所」の重要性は、実は、外国人の子どもに限った話ではなく、すべての子どもに共通で言えることでもあります。『ルポ 保健室 子どもの貧困・虐待・性のリアル』（秋山千佳著、朝日新書）という、現代の子どもの学校での「保健室」という場所から考察した本がありますが、その中で保健室は「学校の中で数少ない、否



>>> ボランティア活動・社会貢献活動

定されることのない場所」だとされます。学校は共生の場であるとともに競争の場でもあります。学力や人間関係で他の子どもたちと比較されやすく、ゆえに否定の感情が生まれやすい。他者との競争を強いられる学校において、避難所の役目を果たしているのが保健室です。だから教室に馴染めない子どもたちは、保健室に自分の居場所を見つけるのだと言います。

このボランティアも、学校における保健室のように、子どもたちが「自分を否定されない場所」を目指しています。子どもたちには、自尊心を育みながら、自らの将来を信じて学習を進めてほしいと願っています。

「ボランティア」に興味がある人に

最後に、「ボランティアに興味はあるけど、参加には二の足を踏む」という人向けに、ボランティアに参加するときの心構えについて語ってみます。と言っても、私自身のボランティア歴は浅いので、あくまで話半分で読んでください。

まず1つ言えるのは、ボランティアをするときに、あまり「与える」ことにこだわらなくてもよいということ。ボランティアと言うと、自分の時間とスキルを誰かに「与える」行為だと思つて、とりあえず何かを与えようと頑張りがちです。実際、そういう側面は確かにあるのですが、でも、そのように何かを「与える」というところにフ

ォカスしてボランティアを捉えると、あまり良い結果にはつながりません。

ボランティアを「与える」ことだと捉えてしまうと、ボランティアが何かを「与える」側で、相手はそれを「与えられる」側である、という構図に縛られてしまいます。この「与える」→「与えられる」という関係では、「与える」側の人は当然ですが疲れてきます。与えることはエネルギーを使うからです。善意が無尽蔵に湧き出す聖人君子でもない限り、与えてばかりでは持ちません。

でも問題はそれだけではなく、「与えられる」側の人もまた、与えられることに疲弊してきます。一方的に何かをもらうばかりだと、人は気後れしたり、後ろめたさを感じるものです。もらっているばかりというところに罪悪感を覚えて、ときにはプライドが傷ついたりします。だから、「与える」ばかりに集中してしまうと、ボランティアと相手の双方が消耗していき、善意が空転していく結果に陥りがちです。

自分の問題にするいつ

ではどういうモチベーションでボランティアに臨むとよいのか。私はボランティアとは、「社会のいろんな問題を、自分の問題にする場所」だと考えています。

例えば、先に述べた外国人の子どもの「人間関係」の問題。外国人の子どもが教室で孤立しがちであるというのは、彼ら自身の

問題であるとともに、日本社会の問題でもあります。日本に外国人は増えているとは言え、まだ割合としては少なく、彼らを「異質」な存在として捉えてしまう社会の目があります。いま国ぐるみで「多文化共生」が叫ばれているのも、そういう見方を変えるためです。

これを読んでいる人は、ぜひ想像してみてください。自分が小学生や中学生のとき、クラスに中国やブラジル出身の子どもが1人いたとして、その子に自分から話しかけたでしょうか？ その子の日本語がきちんなくても、馬鹿にしたり茶化したりせずに、真摯に耳を傾けることができたでしょうか？

このように、外国人の子どもの問題は、私たち自身の問題でもあるわけです。「異質な存在である彼らと接することで、日本社会の「普通」が普通ではなかったと気づかされます。だから、外国人の子どもを支援するボランティアとは、子どもたちのアイデンティティを守りつつ、一方でボランティアが絶えず自らのアイデンティティを再考する場でもあるのです。

大人になると、テレビやインターネットで悲惨なニュースに触れて心を傷めても、数分もすればその悲惨さをきれいに忘れてしまいます。どんなに深刻な問題でも、その当事者でない限りは「自分と関係ないこと」として消費されがちです。だからこそボランティアのように、社会の問題を、自分の問題へと変えられる場所はとても貴重です。